

SWY

Ship for World Youth

2019
5.19

明治150年記念

「世界青年の船」事業
帰国報告会

ONE LIFE

後悔のない、航海を

ご挨拶



帰国報告会実行委員長
早坂 将輝

本日は明治 150 年記念「世界青年の船」事業の帰国報告会にお越しください誠にありがとうございます。報告会の実施にあたり内閣府、日本青年国際交流機構、青少年国際交流推進センターの方々、その他関係者の皆様に多大なるご支援・ご協力頂きました事、この場を借りてお礼申し上げます。

我々は、日本代表参加青年として約 40 日間の航海を終えて来ました。短い時間でしたが、日本青年と 10 ヶ国から集まった外国青年達との経験は、紛れもなく我々一人一人にとって大きな財産となりました。同じ空気を吸い、衣食住を共にし、勉強し、そこで喜び悩みながら成長した事は、大変素晴らしく、私達の価値観を大きく変えました。なにより世界中に家族と呼べる存在が出来ました。本日は我々が事業を通し、何を感じ、何を学んだのか、本事業の魅力を皆様に感じて頂けたら幸いです。



ナショナル・リーダー
古山 茉莉乃（前列右から 2 番目）

約 1 ヶ月の間、世界中から集まる同世代の若者と同じ屋根の下で寝食を共にし学び合う「世界青年の船」事業。Life changing experience と言っても過言ではないほどの経験がそこにあります。

世界中に益々溢れていく文化や宗教、考え方などの多様性は、実際の生活の中で体感してこそその違いを理解できるものだと思います。もちろん、多様であるがため異なる価値観によって衝突することは日常茶飯事です。しかし、それこそがこの事業の醍醐味だと言えるでしょう。

世界の縮図とも言える環境の中で、様々なバックグラウンドを持つ仲間から刺激を受け、自分と向き合い、挑戦して失敗し、失敗から学ぶことで自分の中に眠っている可能性に参加青年一人一人が気づいたのではないのでしょうか。今回、日本のナショナル・リーダーとして何より大切にしたのは、誰もが安心して自分自身に挑戦する環境づくりでした。世界中に家族のように大切な友人ができ、世界がぐっと身近になる。まだ見ぬ自分の可能性に出会える... そんな世界青年の船。本日は、参加者の生の声を通して、一人でも多くの方にこの事業に興味を持っていただけたら幸いです。

サブ・ナショナル・リーダー
村上 達哉（後列左から 3 番目）

見渡す限りの大海原、情熱溢れる 240 名を乗せた船、刻一刻と変わりゆく感情、世界中から集結した仲間との 1 秒 1 秒を大切に過ごした 34 日間の航海であつたと思います。

参加青年の挑戦を応援したい、そんな想いを持って日本のサブ・ナショナル・リーダーとして事業に参加しました。事業の準備期間も含め、一人一人と正面から向き合い、みんなが思いっきり活動できる環境を作れるよう全力を注ぎました。日々の活動において、言語など多様なバックグラウンドを持つ人々に囲まれた環境のなかで思うように行動を起こせずに思い悩む人もいました。しかし、失敗を恐れることなく多くの人が果敢にチャレンジした結果、一人一人が持つ唯一無二の個性や才能を発揮する姿を見守ることができました。

世界 11 ヶ国 240 名で築き上げた強い絆を大切に、それぞれのフィールドで各自の持つ可能性を最大限発揮することを願っています。

Contents



01 ご挨拶

03 「世界青年の船」とは？

明治150年記念「世界青年の船」事業概要

- …03 日本参加青年123名の内訳
- …04 参加国
- …05 プログラム全体日程
- …06 船上生活のひとコマ

07 活動紹介

- …08 レターグループ
- …09 コース・ディスカッション
- …12 委員会
- …13 ALL PY セミナー
- …14 PEER LEARNING セミナー
- …17 クラブ活動
- …18 ナショナル・プレゼンテーション
- …19 自主活動
- …22 寄港地活動

25 応募から乗船までの流れ

26 事前準備について

27 SWYを通して学んだこと・感想

28 事業を終えて、これから

29 よくある質問と回答

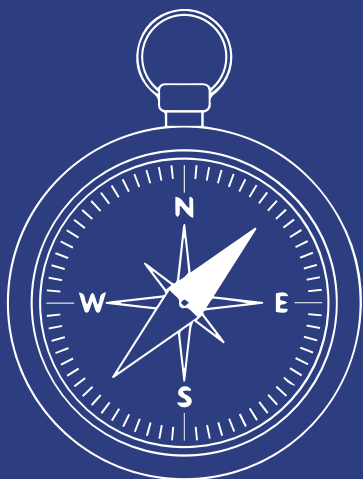
－内閣府青年国際交流事業の紹介

Ship for World Youth
SWY

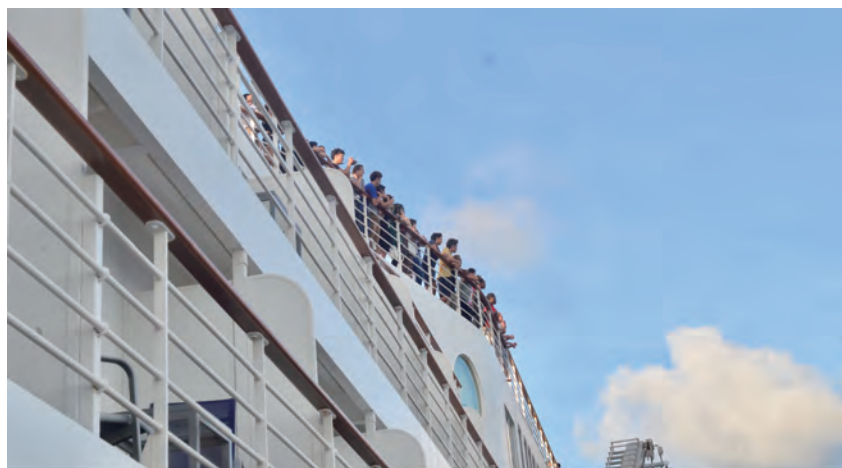
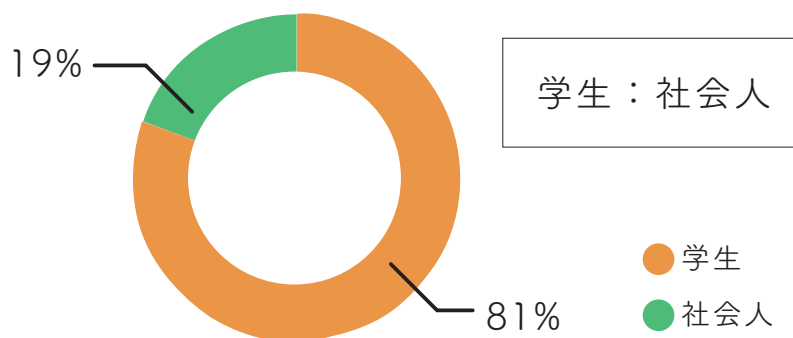
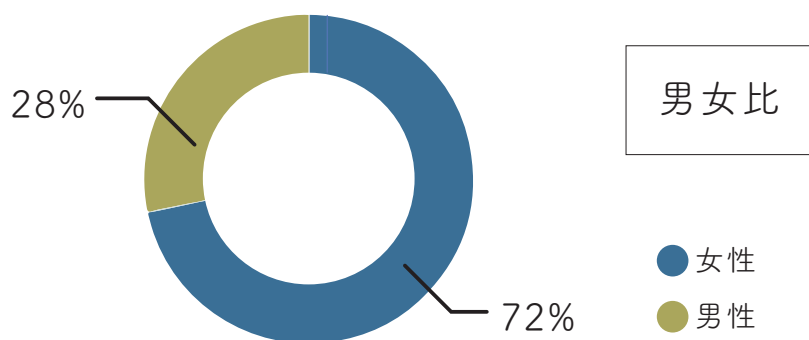
「世界青年の船」とは？

「世界青年の船」事業は、内閣府が行う国際社会・地域社会で活躍する次世代グローバルリーダー育成事業の1つです。世界各地から集まった海外青年と船内で共同生活をしながら、ディスカッションや文化交流等を通して、異文化対応力やコミュニケーション力を高め、リーダーシップ等の向上を図ります。また、訪問国ではディスカッションのテーマに応じた施設訪問や現地青年との交流などを行います。日本国籍を持つ18歳～30歳の方が対象です。

- ・「SWY(スワイ)」
=「Ship for World Youth」
の頭文字をとった呼び方
- ・「PY」
=「Participating Youth
(参加青年)」の総称
「All PYs(全参加青年)」
「JPY(日本参加青年)」
「OPY(外国参加青年)」
- ・「NL」
=「National Leader
(ナショナル・リーダー)」のこと。
国ごとのリーダー。



日本参加青年 123 名の内訳



参加国



日本

明治150年記念
「世界青年の船」



オーストラリア連邦



チリ共和国



エクアドル共和国



ギリシャ共和国



ソロモン諸島



スウェーデン王国



タンザニア連合共和国



トルコ共和国



アラブ首長国連邦



バヌアツ共和国

プログラム全体日程

日程	9:30-10:40	10:50-12:00	13:40-14:50	15:00-16:10	16:20-17:30	20:00-21:10	
1/15（火）	外国参加青年来日						
1/16（水）	オリエンテーション、歓迎会						
1/17（木）	地方プログラム	地方プログラム（表敬訪問）					
1/18（金）		地方プログラム（歓迎会、ホームステイ）					
1/19（土）		外国参加青年：地方プログラム（ホームステイ） 日本参加青年：出航前研修					
1/20（日）		外国参加青年：地方プログラム（東京へ移動） 日本参加青年：出航前研修				アイスブレーキング	
1/21（月）	陸上研修	開講式、全体オリエンテーション	コース、委員会、セミナー、 その他の研修の説明	コース顔合わせ	委員会顔合わせ		
1/22（火）		都内視察				デリゲーション・ミーティング	
1/23（水）		午前休	リーダーシップ・セミナー	委員会活動	レター・グループ活動		
1/24（木）		コース・ディスカッション①		課題別視察		委員会活動	
1/25（金）		スポーツ&レクリエーション①		午後休			
1/26（土）		委員会活動	レター・グループ活動	デリゲーション・ミーティング	コース・ディスカッション②	オリセン退所説明	
1/27（日）	船上研修	横浜へ移動		フリータイム	乗船	出航前オリエンテーション	
1/28（月）		心理学セミナー/避難訓練		オープンシップ、出航式、横浜出港 [出港16:00]		自主活動	
1/29（火）		管理官講話	デリゲーション・ミーティング	各国紹介セッション リハーサル	各国紹介セッション	自主活動	
1/30（水）		各国紹介セッション		船長講話	委員会活動	クラブ活動紹介	寄港地活動オリエンテーション
1/31（木）		那覇（寄港地活動）、出国手続き [入港8:00、出港22:00]				自主活動	
2/1（金）		委員会活動	Peer-Learningセミナー紹介	コース・ディスカッション③		デリゲーション・ミーティング	ナショナル・プレゼンテーション （日本）
2/2（土）		All-PYセミナー（テーマ：異文化理解）		公式写真撮影&ブリッジツアー			レディース・ナイト&ジェンツ・ナイト
2/3（日）		Peer-Learningセミナー①		クラブ活動A-①		パラオ・オリエンテーション	消灯日
2/4（月）		パラオ（給油・給水） [入港8:00、出港17:00]				ナショナル・プレゼンテーション(UAE)	
2/5（火）		スポーツ&レクリエーション②		デリゲーション・ミーティング	午後休		自主活動
2/6（水）		All-PYセミナー（テーマ：リーダーシップ）		コース補講	クラブ活動B-①		ナショナル・プレゼンテーション （トルコ）
2/7（木）		クラブ活動A-②		委員会活動	寄港地活動オリエンテーション		消灯日
2/8（金）		ダーウィン（寄港地活動） [入港8:00]				レセプション・ディナー	
2/9（土）		ダーウィン（寄港地活動） [出港18:00]				ナショナル・プレゼンテーション （ギリシャ）	
2/10（日）		午前休	寄港地活動振り返り		委員会活動	自主活動	
2/11（月）		キャビン・チェンジ		公式写真撮影		委員会活動	ナショナル・プレゼンテーション （エクアドル）
2/12（火）		All-PYセミナー（テーマ：自由）		委員会活動	Peer-Learningセミナー②		自主活動
2/13（水）		クラブ活動B-②		コース・ディスカッション④		自主活動	ナショナル・プレゼンテーション （タンザニア）
2/14（木）		スポーツ&レクリエーション③		委員会活動	寄港地活動オリエンテーション		消灯日
2/15（金）		プリズベン（寄港地活動） [入港11:00]				レセプション・ディナー	
2/16（土）		プリズベン（寄港地活動）				自主活動	
2/17（日）		プリズベン（寄港地活動） [出港19:00]				ナショナル・プレゼンテーション （オーストラリア）	
2/18（月）		午前休	寄港地活動振り返り		委員会活動	自主活動	
2/19（火）		All-PYセミナー（テーマ：自由）		クラブ活動A-③	デリゲーション・ミーティング	ナショナル・プレゼンテーション （チリ）	
2/20（水）		コース・ディスカッション⑤		Peer-Learningセミナー③		ホニアラ・オリエンテーション	消灯日
2/21（木）		ホニアラ（給油・給水） [入港8:00、出港21:30]				ナショナル・プレゼンテーション （ソロモン諸島）	
2/22（金）		自主活動		委員会活動	事後活動セッション①		自主活動
2/23（土）		Peer-Learningセミナー④		クラブ活動B-③		委員会活動	ナショナル・プレゼンテーション （スウェーデン）
2/24（日）		エキシビション準備		エキシビション			自主活動
2/25（月）		午前休	事後活動セッション②		デリゲーション・ミーティング	ナショナル・プレゼンテーション （バヌアツ）	
2/26（火）		サマリー・フォーラム準備		サマリー・フォーラム			自主活動
2/27（水）	講義：明治から学ぶ日本の先進性/評価会		修了式	下船説明	フェアウェル・ディナー		
2/28（木）	リエントリーセミナー	下船準備					
3/1（金）	東京帰港 解散式・解散交歓会、下船 [帰港8:00]			（外国参加青年は空港へ、 日本参加青年は帰国後研修へ）			
3/2（土）	日本参加青年帰国後研修						



「デリゲーションミーティング」という国ごとのミーティング。船上での悩みや思いつき、目標など様々な思いを日本語で共有する時間があります。



毎日 360 度水平線という絶景に思わず某名作映画のワンシーンを再現



34日間の船上ライフの拠点となるキャビン。まずは参加国の異なるキャビンメイト3人で自分のベッドやお互いが気持ちよく過ごせるようなルールを相談して決めるところからスタートです。キャビンの雰囲気や時間の過ごし方はメンバーによって様々。今回はキャビンチェンジがあったため、そんな貴重な経験を2回も味わうことができました。

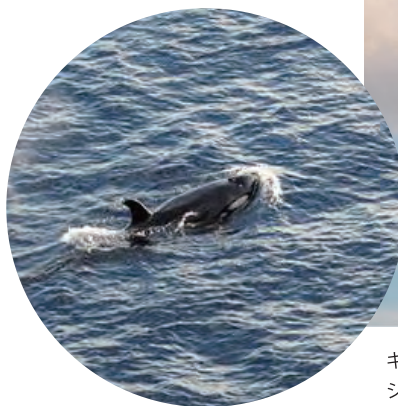
船上生活のひとコマ



ある日のランチ。船上では毎食、栄養バランスに配慮したバラエティ豊かな料理がビュッフェ形式で提供され、参加国各国の料理が日替わりで味わえました。約1ヶ月間ほとんど毎日違うメニューで感激。ちなみに、味噌汁とお米は基本的に毎日提供されていたので、あまり日本食シックにはなかったです！食事制限がある参加青年のための特別メニューもあります。



朝や、空き時間にデッキでランニング、筋トレ、ヨガ、ウクレレ演奏などをしてリラックスしている人もたくさんいました。新しい習慣を身につける機会になるかも？



キャプテンによる船内アナウンスで「10 時の方向にシャチが見える」と知らされれば、たとえご飯の途中でも走って見に行き盛り上がります。クジラやイルカをすぐそばで見るチャンスが何度もありました！

船に乗って何するの？

活動紹介





Letter Group

レターグループは、240人の参加青年を11グループに組み分けした、活動の基幹となる単位の一つです。参加青年はいずれかのレターグループに所属し、各国ナショナル・リーダーがリーダーを務めます。1グループ約22人で、日本青年・外国青年の割合は1:1となります。メンバー構成は事前に決められているので、自分のグループに美男美女がいたら心の中でガッツポーズしましょう。船上では主に一日に2回、レターグループで集まる機会があります。モーニングアッセンブリーとレターグループミーティングです。毎朝行われるモーニングアッセンブリーではメンバーの健康管理と生存確認のため、点呼を取り体温を測ります。レターグループミーティングは各委員会からの情報を共有し、一日を振り返る大切な時間です。私たちのグループは余った時間に自己紹介プレゼンを行い、メンバー同士の相互理解を深めました。

レターグループは笑いたい時は一緒に笑ってくれて、泣きたい時はそっと隣に寄り添ってくれる心の拠り所、いつか帰るよ僕だけの home。(渡邊 優稀)



平和な世界をつくるための教育コース

平和な世界の実現のために大きな役割を持つ「教育」に焦点をあて、心の知能、学習障害、多文化教育など様々な観点から議論を重ねました。現代の複雑な社会問題を理解、解決するために必要なスキルを、参加青年間の意見交換を通して学び合います。

私たちは常に、“Education is a key to change the world.” という考えのもと、どんな社会問題の解決にあたって教育が必要不可欠であること、教育が平和な社会の実現に貢献できるということを学びました。様々な教育的バックグラウンドを持つ参加青年が集まり、各国の教育の現状や課題を共有し合い、教育のあり方や教育の重要性について意見交換を深めました。私自身、将来は教員になることを志しており、参加青年間でそれぞれが受けてきた教育について意見を交わし、教育の重要性について議論できたことは、大変有意義な経験になりました。『教育で平和な世界を作る』そんな教育の担い手を目指し続けます。

(谷垣 徹)



お互いを高め合う実践型エンパワメントコース

本コースではリーダーとしてあるべき姿や、視点を変えて物事を見る力を身に付けることができます。自分や他人をどのようにエンパワーできるかをテーマに、ディスカッションを中心とした様々な活動を行いました。

エンパワーとはどういう意味だと思いますか？エンパワーの定義は難しく、それを考えること自体がこのコースのミッションでもありました。コースを修了した今、私はその意味を「自分と他人が持ち得る能力を最大限に引き出す力」だと解釈しています。コースでは自分の得意なことをメンバーとシェアしたり、ディベート大会をしたりしました。ディスカッションの内容は日常的な出来事から人生に関することまで多岐にわたり、私たちを考えさせ、心の深いところで理解し合う美しさに触れました。エンパワメントコースでの体験が今、日常生活の中で自分をエンパワーしていますし、今後一人でも多くの人をエンパワーできればと思います。(下舞 凜子)

グローバル・シティズンシップコース

国際化が進む現代社会において、同じ地球に生きる一人の市民としてどのように異文化と共生していくか、そして国際社会におけるリーダーとしてどのような資質が求められるかを中心にディスカッションが行われました。

「時間を守ることにに関して、集団的な日本人は周りの人に迷惑がかかる事を嫌うため、そして個別的なスウェーデン人は、個人としてその責任を負う必要があると考えるため、時間に厳しい人が多い。一方、中間的な意識を持つ人の多いチリでは時間にルーズな人が多い。」これはスウェーデン人・チリ人との3人で話し合われた内容ですが、「時間」一つをとっても、このように「文化」の違いとそれがもたらす「行動」の違いに気がつくことができます。議論を重ね、船上で様々な活動を行う中で、このように文化的背景を考えて多様性を認める力は、その人を「Global Citizen」たらしめるだけではなく、国際化が進む現代社会におけるリーダーとなる為に必要な力であるという事に気がつきました。(川合 裕己)



「世界青年の船」事業の研修の柱のひとつで、参加青年は7つのテーマの中から興味関心のあるものを選び、各ファシリテーターのリードのもとディスカッションを行います。陸上・船上研修中に全5回のセッションがあり、最後に学びを共有するサマリー・フォーラムが行われます。各コースの概要と、参加青年の声を紹介します。

グローバルヘルスコース

本コースでは性別、年齢、国籍、属する社会背景の異なる参加青年が私たちにとって世界で当たり前のように使われている健康、“Health” とは何か、何が健康に影響を与え、自分たちに出来ることは何かを話し合います。共に考えることを通してなぜ今私たちが、健康を世界規模で“Global” に考える必要があるのか学びます。

私たちは健康を損なうときに初めて健康について考えることが多いと思います。しかし船の上では、迫り来るインフルエンザの脅威、ネット環境がなくプライベートがゼロの空間に加え異文化に揉まれ続けることへのストレス、日本周辺でひどかった船酔いなど、あげればきりが無いほど私達は健康のありがたみを感じるチャンスに恵まれていました。ディスカッションを通して、新たな気づきを得ることができ自らの健康行動が他者を刺激し、ひいては集団全体の健康増進の一助になることを学びました。こうして同じテーマでディスカッションをした仲間が全世界にいて、各々が自分の得意な分野から健康に対するアプローチをすることで私たちは周囲の人々と社会を巻き込みながら健康になれると信じています。また、そんな素敵な仲間と私たちを導いてくれたファシリテーターに出会えたこのコースに心から感謝しています。(中村 やよい)



国際協力コース

国際協力コースは、地球規模の問題を身近なこととして想定し、国境を越えた「国際協力」の精神に基づいて行動するという視点を得ることを目的としています。自分と全く異なるバックグラウンドを持つ参加青年からの発表や議論を経て、知識を深め、互いに学び合いました。

主に近年国際協力の分野で最も重要な問題の一つである、「難民」にテーマを絞って展開して行きました。また、ファシリテーターがパレスチナという第一線で活躍されている方だったので、現実に行っている事柄を含めた毎回の導入部分はディスカッションに熱を注いでくれました。私が一番興味深く感じたのは、自分の出身国に関わらず、「先進国・開発途上国」や、「難民受入国・難民の多い国」という役割を担ってワークを行ったことです。その当事者になって深く考えてみると、それぞれの思惑があって、どう世界の問題が動いているのか解った気がします。このコースのおかげで、地球規模の問題も、他人事ではなく関心を持ち、積極的に関わっていかうという気持ちが芽生え、また、どんな問題でも皆で協力すれば、解決できるかもしれないという希望を持つことができました。(近藤 花映)

情報とメディア コース

情報とメディアコースでは、それぞれの国ごとに異なるメディアの常識を共有しながら、情報がいかにして生まれ、人々に伝えられていくかというプロセスを考え、観察しました。

私がこのコースを選んだ理由は、色々な視点からみたメディアについて興味があったからです。9月の事前研修のコース・ディスカッションから下船するまでの約半年間を比べてみて率直に言うと、このコースに参加したことで私のメディアについての知識は特に増えなかったと思います。しかし、印象に残った経験は、寄港地ごとに、機会がないと滅多に行けないようなメディアに関連した施設に行ったことです。地域ベースのラジオ局や国ベースでのテレビ局に行かせていただきました。そこで私はメディアは日常の出来事にとってとても大きな存在であり、人と人を繋げてくれる必要不可欠なものだということを学びました。このコース・ディスカッションを通して沢山の青年にも出会えたことも、沢山のアクティビティの中の良い経験の一つだと思いました。（中村 妃那）



ソフトパワー と青年外交 コース

本コースでは、「ソフトパワー」や「外交」の概念を議論し、理解を深めるとともに、参加青年自身がどのように国際社会と向き合うっていくかを追求していくことを目的としています。コース中では、グループに分かれ、それぞれが国際問題を取り上げ、参加青年としてできる解決策を議論し、実践や発表をする過程を通して個々の「外交力」を高めていきます。

“Soft power”と“Youth diplomacy”という、とても漠然としたコーステーマに、国際関係を専攻している者からカメラマンなど様々なバックグラウンドを持った青年が集まり、スタート当初は手探り状態でした。しかし、大きなテーマだからこそ、海洋汚染や若者の雇用など各人が問題意識を持っているトピックについて議論をし合い、行動に移すことができました。このように青年自身が国際社会に関心を持ち、仲間たちと考え行動する過程こそが「ソフトパワー」であり、「青年外交」であるということに気付き、まさに「世界青年の船」の本質だと感じています。（大西 由起）

陸上・船上でのプログラムをより円滑に、主体性を持って行うために、様々な委員会が組織されます。参加青年は全員どこかの委員会に所属し、各委員会は日本参加青年と外国青年で構成されます。

Committee 委員会

船ではこんな委員会があります！

AGL 委員会・ALL PY セミナー委員会・Peer Learning セミナー委員会・広報委員会
ナショナル・プレゼンテーション委員会・イベント委員会・クラブ活動委員会・
寄港地活動委員会

AGL 委員会



私たちAGL (Assistant Group Leader) の主な役割は、参加青年の健康管理を目的とした点呼と体温測定でした。他にも重要な決定事項を参加青年に伝達したり、日々の船内での青年からの意見を汲み上げ、管理部に伝える懸け橋のような役割を担っていました。日々の活動が効率的に滞りなく遂行されるように様々な工夫を凝らしました。具体的には、朝の点呼をよりスムーズに行い、短縮した時間を有効に使うという試みで「SWY OLYMPIC」という検温の順位を競うイベントを開催したり、情報伝達を確実に行うためにナショナル・リーダーのミーティングにも出席し積極的に運営に関わったことが挙げられます。このように自分たちのアイデアをもとに活動をアレンジできるのでやりがいがありました。華々しく目立つ存在ではありませんでしたが、毎日の業務を通して参加青年を支えることができるので「縁の下の力持ち」という表現がぴったりくると思います。(川村 真由)

広報委員会

今年度の SWY から新設された広報委員会では公式の企画報告書の作成を最重要タスクとする一方で研修中に出たフォトコンペティション、動画作成などのアイデアを実行しました。帰国報告書の作成について、船上研修中はイベントごとに参加青年からの感想や写真を募った上で外国参加青年と協力しながら日英の二カ国語で報告書の原案作成を行いました。フォトコンペティションは AGL 委員が企画した SWY Olympic に便乗してレターグループ対抗の写真コンテストを開催しました。ここでは何百枚もの写真が集まりましたが、SWY だからこそ撮ることができた素敵な写真ばかりで事前選考ではとても悩みました。三つ目の動画作成は SWY ではどのような活動をしているか知りたいという声があったことから、広く SNS などでも共有できる陸上研修から船上研修までで収録した動画をまとめたものを作成し、船上では最終日に参加青年全員で鑑賞をし感動を呼ぶものになりました。(久保村 萌乃果)



イベント委員会



イベント委員会では乗船前の研修からプログラム最後のパーティまでさまざまなイベントを企画します。今回は、船の上でトレジャーハントや運動会、そして宗教や男女の目を気にせず楽しめるレディース & ジェントルマンナイトを開催したりしました。一つ一つ自分たちで考え、みんなが楽しめるものをつくろう！という意識を持って取り組みました。さまざまな意見や価値観を持つ仲間とイベントを作るため、ぶつかる時もありましたが試行錯誤して納得のいく楽しいイベントを企画、運営できました！委員会のメンバー、参加してくれたみんな、サポートしてくださった管理部の方々など多くの人に感謝しています。(熊澤 萌里)

ALL PY Seminar ALL PY セミナー

プログラム中には、リーダーシップ、異文化理解についてのセミナーが参加青年によって行われ、全参加青年が受講します。ただスピーカーの話聞くだけでなく、参加青年同士が体や口を動かしながら相互に学び合う機会でした。



日本参加青年による ALL PY セミナー “Think about our future through sustainability” の様子

共に何かを作り上げる時間 企画・運営

私にとって SWY で最も記憶に残る活動の一つがこの ALL PY セミナー委員会でした。自身の人生において、これほどまでタフに、かつのびのびと人と何かを創り上げた、と実感したことは他にありません。具体的には、参加青年同士が TED トークのような各々の知識・経験を 240 人全員の前で共有するセミナーの企画・運営をリーダーとして行いました。委員会は年齢や性格、価値観が多様な 40 人のメンバーでしたが、共に意思決定を行っていくこと、そして何よりも行動に移してもらうことの難しさを実感しました。しかし、この委員会を通じて、言語や文化が異なっても熱意が人を動かす力になること、論理的に物事を考えると自然と似たような結論に落ち着くことに気づき、国籍は違えど同じ人間なんだということを強く感じました。これらの経験から得た学びは、今後の社会人生活で活かせると確信しており、また、ここでの人間関係は本当に貴重な財産となりました。（森田 勇平）

偉人から学ぶ起業家精神 プレゼンター

今年の世界青年の船は、「明治 150 年記念」事業の 1 つでもありました。そのため、私達は「明治維新の偉人から学ぶ起業家精神」というテーマで「明治維新プレゼンテーション」を実施しました。最初に「明治」とは何かを説明した後に明治時代の偉人を紹介し、偉人に関するクイズを実施するという形を取りました。明治時代は、日本の近代化が始まり現代の基礎が作られた時代であること、また、当時は起業家精神溢れる社会起業家が多数生まれた時代であることを説明しました。私達が紹介した偉人は、生涯で 500 社起業した「渋沢栄一」と女性教育の先駆者「津田梅子」です。理由としては、明治時代を代表する起業家であることは勿論、下船後各々が自分の地域・コミュニティで活躍する「理想像」として相応しいと判断したからです。偉人達のように自らが環境を変える主体者として動く「起業家精神」を持ち、下船後は一層活躍して欲しいとの想いを込めていました。（河合 将樹）

※このプレゼンテーションは ALL PY セミナーの時間に発表ができなかったため別の時間に ALL PY セミナー番外編として行いました。



自分の経験や専門知識を共有したいと思った時にセミナーを開くことができる機会です。事前にセミナーをやると決めてくる人もいれば、船上で企画する人も沢山います。全て参加青年によって企画・運営され、実践的なワークショップやディスカッションを通して互いに刺激し合い学びを深めます。

Peer Learning Seminar Peer Learning セミナー



船上では計 8 回 Peer Learning セミナー（以下「PL セミナー」）の時間があり、船内のいたるところで様々なトピックのセミナーが開催されました。セミナーを開催した日本参加青年、外国参加青年 5 人を紹介します。

Ask Japanese

岡本 沙椰

私は Ask Japanese と題して PL セミナーを企画しました。このセミナーの目的は参加青年に日本のことを知ってもらうこと、良い点も悪い点も含めて他者の視点から日本を見つめ直すこと、そして議論することで理解を深めることでした。このセミナーの企画方法はとても特徴的で、事前に日本や日本人に関する質問を募集しカテゴリー別で分けたものを当日議論するというものです。セミナーの準備段階はとても楽しく、想定内の質問もあれば、予想外の質問もあり、回答を考える上で普段あたり前に思っていた日本について考えさせられました。当日は日本人も含めて 15 人程参加してくれ、双方向からいい議論ができたと思います。



What is religion for you?

市川 泉

私はPLセミナーで「what is religion for you? (あなたにとって宗教とは?)」というテーマのワークショップを開きました。所属していた国際協力コースで宗教と紛争の関わりを理解するワークショップを体験したことをきっかけに宗教観に興味を持ち、もっと多様な参加青年の宗教観を知りたいと思いました。私の役割はみんなが安全に話せる場を作ること。準備のために他の参加青年からファシリテーターの方まで大勢の人に助けられました。無事ワークショップを終えることができたとき、達成感より感謝の気持ちの方が大きくて、SWY という環境で挑戦できてよかったなと感じました。普段大学の友達とは何気なく扱うことのないちょっとディープでセンシティブな「宗教」というテーマ。いろんなバックグラウンドを持ってる SWY メンバーだからこそ話せる・聞ける話があり、充実した時間を過ごすことができました。



Australian wildlife and environments

メアリー・イザベル / オーストラリア参加青年

I did a peer-learning seminar on Australian wildlife and environments. I am passionate about the unique and interesting animals, plants and landscapes we have in Australia, and wanted to share this with other SWY participants. In the seminar, I discussed some of the different ecosystems of Australia, the wildlife that live there, and some of the threats they face. I also discussed ways in which everyone can take action in their everyday lives to protect the natural environment. It was great to have lots of PYs attend the seminar and be engaged in hearing about Australian nature. I got lots of great questions, and had interesting discussions about animals and sustainability as a result of the seminar.

私は、Peer-learning Seminar でオーストラリアの野生動物に関する現状を環境問題という大きな視点を踏まえ発表しました。私は、オーストラリア固有の独特な動物、植物、土地そのものを愛しています。その素晴らしさを参加青年と共有したく思い、セミナーを開催しました。セミナーでは、野生動物の紹介やその生態系を破壊している原因などについて話しました。また我々が、日々の生活を通して生態系を守るために、何が出来るのかを共に考えました。このセミナーを通して、参加青年がオーストラリアの環境問題や生態系に興味を持ち、沢山の質問を投げかけてくれたことで私自身の学びにもなりました。



日本語セミナー

田中 菜見子

私はタイで日本語教師をしていましたが、多国籍の環境で教えた経験がなかったので、ぜひSWYでやってみたい！と思い、9月の事前研修の際に仲間を募って、日本語チームを結成しました。そこから本番までは授業テーマ毎に分かれて、スカイプを通じて授業のシナリオを事前に作成しました。大変だったのは、初めて英語を使いながら日本語を教えることと、どんな授業だったら参加者同士が交流しながら学べるか、講座の運営方法について色々悩んだことです。

擬態語・擬声語の回では、参加者がすごく楽しみながら学んでくれました。講座後にはSWYだけの新しい擬態語を作った等、意外と反響がありました。また、方言を教えたときは、参加者自身も各国の方言を紹介しあうなど、ワークショップ形式で私自身も色々なことを学びました。実際に終えてみて、日本語の面白さを再認識でき、今後も様々な国の人に教えてみたいという思いが強くなりました。



Language Facts and Questions

ヴィクター・オーランド / スウェーデン参加青年

Before I came to SWY I didn't think I would want to hold a seminar because I didn't think I had anything I knew more about than anyone else. But then I realised two things, the first one was that people generally were interested in linguistic facts if put forward in a good way, and also that the JPY who had studied linguistics, had studied totally different things than I had. So when I talked to them they were also really interested in the stuff I had learnt about languages, even if they had studied for a longer time than I have. The reason I held a seminar was because someone said "You should do a PL seminar!" and since the PL committee said they needed more people I thought it would be nice.

I didn't have way too much time to prepare and I couldn't check any of my facts, so it was a bit messy maybe and I probably said some things that were wrong, but even if some specific part was wrong it's the process and the tendency of language development that's still the same.

Yes, it was fun, but I kinda regret not bringing anything, like my course book or something, so I could check my facts.

事業に参加する前は船上研修中にセミナーを開催しようとは思っていませんでした。なぜなら、自分には他の青年より物事を知り得ていないと思っていたからです。しかし船の中で、私の学んできた言語学に興味を持ってくれた人がいました。友人からの後押しもあり、自分の学びを共有する事に意味があると思えました。私たちは皆、異なった教育システムの中で育ち、言語学に対するアプローチは人の数あると知りました。その気付きから、言語学に関する学びを共有する事に面白さを覚えました。たとえ、自分のセミナーを聞く人が自分より長く言語学について学んでいたとしても、その人は私のスウェーデンでの学びに興味を示してくれました。

一つ心残りとして、セミナーの準備にあたり十分な用意が出来なかった事が挙げられます。しかし、限られた情報の中で試行錯誤し、発表をやり遂げた事は自分の成長に大きく繋がったと思います。

Club Activity クラブ活動

参加青年が主体となって、自国の文化を代表するダンスや音楽、言語などを他の参加青年に教え、互いに学び合う活動。参加青年は必ず1人2つのクラブに所属します。最後に各クラブの活動内容や成果を発表するエキシビションがあります。

クラブの例：チリで話されるスペイン語（チリ）・ラテンダンス・セレブカ（アフリカンダンス）
ルチャ祭（スウェーデン）・茶道・トルコ語・ギリシャ語・・・etc

柔道クラブ



『船の上で柔道がしたい』その思いを胸に集まった個性豊かなメンバーたち。投げたり押さえ込んだりと、柔道ならではの動きを皆楽しんでいました。共に汗をかき、共に笑い、一生忘れることのないひとときを沢山共有できました。エキシビションで、練習の成果を発表した後、海を背景に、柔道着を着て世界各国の青年たちと笑顔で記念撮影。まるで夢のような状況の中、彼らから口々に言われた言葉は“Come to our country. Let's do judo again. I will start judo in my country.”でした。その瞬間、今までに感じたことのない達成感と幸福感に包まれました。スポーツは勝つためだけに行うものではない、スポーツを通して人はつながれるということを実感しました。柔道を通してつながった仲間たち。いつか再会できる日が楽しみです。（山川 朝未）

書道クラブ

私は海外経験が豊富だったわけではなく、特別な経験があるわけでもありませんでした。ただ一つだけ、日本文化に触れてきた経験があることは確かです。特に書道は長く続けてきたため自信がありました。そして、様々なバックグラウンドを持つ人達が集まる中で自分がどう SWY に貢献できるのかを考えた結果「自分が今までやってきた書道をこの船で活かしたい」9月の事前研修でそう思い、書道クラブを立ち上げることを決めました。全3回（各70分）のクラブには約20人の海外青年が参加し太平洋の真ん中で皆と書道を楽しみました。予定通りに進まず苦労したことも多くありましたが、企画者同士の協力・他の参加青年からのアドバイスやサポートのおかげでアクティブかつ学びも多いクラブになりました。書道を通して世界と繋がれた経験は最高の宝物です！（八鳥 尚幸）



空手クラブ



今回の寄港地、沖縄に合わせて琉球王国発祥の空手をクラブ活動の一つとしました。クラブでは基本的な“型”を中心に、空手の精神や基本的な動作の習得を目標としました。参加者も各々の目標を胸に、休憩時間も自主練習をするほど熱心に練習に取り組んでいました。空手の動作には一つ一つ意味があり、立ち方からお辞儀、突き、蹴り、受けなど、様々な動作について覚えることは非常に多かったのですが、参加者は興味津々でたくさん質問をし、楽しそうに励んでいました。そして掛け声なども日本語で行い、美しく礼をし、「えいっ」と勇ましく叫ぶ様子は、まさしく空手道の精神を体現していました。本番の発表会でも学んだことを堂々と披露し、素晴らしいパフォーマンスで拍手喝采をいただくことができました。（金田 百恵）

各参加国の社会や文化について紹介する機会です。
昨年度は以下の2部構成で運営されました。

National Presentation ナショナル・プレゼンテーション

第1部

ダンスや寸劇、音楽、伝統芸能などのパフォーマンスによって各国の地理や歴史、文化や社会課題について発表

第2部

物産展のような形式で各国の飲み物、お菓子、などの特産品や民族衣装などを体感できる会場を準備



船上で行われるナショナル・プレゼンテーション（以下「NP」）本番に向けて、9月からおよそ半年間、演目を選ぶことから始まり、当日の流れを何度も話し合いながら、様々なことを同時並行で行いました。特に、研修が始まってから本番までは夜遅くまで何度も話し合いをし、毎日本当に忙しかったです。

しかし、NP本番の日、自分たちがゼロから作り上げたものが目の前で形になっているのを見て、それまでの忙しさを忘れるくらい感動したのを覚えています。異なる価値観を持つ集団の中で活動する難しさを日々実感しましたが、「話すことを怠らない」を意識しながらその都度話し合いをした結果、委員会のまとまりが生まれました。日本のNPを作り上げることができたのは、NP委員会メンバーや演目リーダー、ブースリーダーの影の働きがあったからです。そして何よりも、委員会メンバー全員がリーダーとしての意識を持ち活動できたことが、NP大成功に繋がったのだと思います。（NP委員長 栗原 果凛）

「どの立場でもリーダーであり、相手のリーダー力を引き出すことの重要性」をナショナル・プレゼンテーションを通して学びました。今年度の日本のプレゼンテーションのテーマは、明治150年を記念し過去から未来への時代の流れでした。浴衣やハチマキをした海外参加青年が見守る中、一致団結した迫力のパフォーマンスはこの事業の雰囲気が一気に変わったと言われる程素晴らしいものでした。今回の為に新しく文化に挑戦した青年や日本文化の魅力に気付いた青年など私たちにとっても自信となる貴重な経験になりました。しかし、このようなパフォーマンスが出来たのは委員会を始め全員がリーダーとして活躍したからだと思います。自分の得意、不得意を伝え行動する人や自然と相手の魅力を引き出している人など気付くと全員が各分野でリーダーとして活動していました。頼り、頼られ、素晴らしいものが出来たという自信を持ち今後もこの学びと経験を決して忘れません。（篠原 リリ子）

What's Voluntary Activity?

自主活動って？

自主活動とは、参加青年たちのアイデアと意思により自由に企画・運営をする活動のことです。休み時間や、夜など公式プログラムがない時間にはいつでも開催することができます。自分のやってみたい活動を事前に決めてくる人もいれば、船上での会話の中からふと思いついて外国参加青年と共同で企画をする参加青年もたくさんいます。環境を思う存分に活用して頭の中にあるやりたいことを船の上で実現させる、という「世界青年の船」事業ならではの魅力です。

Philosophy for Children

飯野 瑠珠

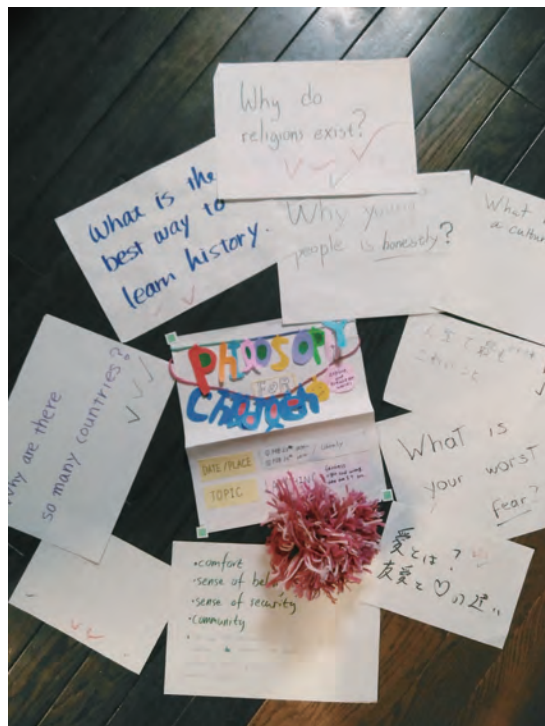
私は船内において、「Philosophy for Children(子どものための哲学)」という対話型の自主活動を行いました。回数は計4回、日本・外国青年や管理部の方々も含めて約40名が参加して下さいました。

この自主活動は、事業応募時から船内で行おうと心に決めずっと温めてきたものでした。多様な参加者同士での対話の面白さを実感したい、人々の心理的な安全を確保する場を作りたい、この経験を教育現場に持ち帰りたいという目的がありました。

自主活動は、全てがスムーズに運んだわけではありません。人々に活動を告知する勇気が出ず、何度も活動を諦めようと思いました。告知出来た後も、「なぜあなたはそれをやるの？」と聞かれた

際に、うまく答えられず後悔したこともありましたが、それでも活動が続けることが出来たのは、応援や参加をしてくれる方々の存在があったからです。実施後に頂いた「ありがとう」「居場所が出来た」といった言葉は、私の中で宝物になっています。

今は学校教員になるため大学院で学び直しをしています。この経験を活かし、次は子どもたちの居場所を支えるべく頑張ります。



Sitting Volleyball

鈴木 雅乃

自主活動として、シッティングバレー *1 を行いました。球は本来のバレーボールではなく、日本発祥のソフトバレーボールを使用しました。障害者スポーツであるシッティングバレーとソフトバレーボールを知ってもらうこと、船上生活でのリフレッシュを目的に、3 度開催しました。総勢 15 人ほどが集まり、試合形式で、スポーツ交流を図りました。

スポーツデッキはバレーボールをするには十分な広さがありますが、通常のバレーボールでは、ボール等の海上落下を防ぐネットを超えてしまいます。しかし工夫次第では、球技も行うことができます。自主活動はどんなことでも自分のやりたいことができます。コース・ディスカッションや委員会活動等で忙しい生活の中で、リフレッシュとしてスポーツの自主活動を開催してみるのもオススメです。

*1 座った状態のまま行う障害者用のバレーボール



SWY LA LA LAND Movie

西村 映海

「SWY LALALAND Movie」ー 250 人の参加青年 (PY) と管理部の方々が、にっぽん丸を舞台に、歌い、踊り、奏でる、1 ヶ月の撮影期間を要した映像制作企画ー。

フラッシュモブを企画した Kantaro と Wataru に、Moe と、映画「LALALAND」を題材にすることを共に提案した Mai を加えた制作チームが 2 時間で構想を練り上げたのは 9 月の事前研修のことでした。1 月のプログラムが開始した直後にこのチームに Taichi と撮影担当の Andres を加え、私たちの制作チームは結成されました。乗船して初めて議論した事項が 80% を占めたため、にっぽん丸の出港とともにチームにとって怒涛の日々が始まりました。

多忙な公式プログラムの合間を縫いながら、人、場所、時間、全ての条件が揃うよう調整し、PY に告知し、ダンスの練習をし、演出を議論し、撮影計画を実行する。一日々の限られた時間の中で、デジタルな連絡手段を使わずにこの大人数を指揮し計画を遂行するには、念入りな準備と、しかしそれを必要に応じて覆す臨機応変な状況判断が求められました。また、南半球の灼熱の太陽が PY の体力を著しく奪うため、迅速かつ無駄のない撮影を強いられたのは、想定外の苦労だったと思います。



(上) スポーツデッキでの撮影風景

船上での企画は往往にして計画通りには進みません。下船前に動画の上映までこぎつけられたのは、あらゆる方々のご協力と、そして高いモチベーションのもと責任感あるメンバーが個々の特長を発揮したからだと思います。

「今年度の参加者にとって最高の思い出を作る」ことを目標としていた私たちにとって、PY の楽しそうな笑顔が何よりの報いでした。どのような形であれ、この企画に関わった皆に心から感謝しています。

今後もこの映像を見るたびに、PY たちが SWY ファミリーとの日々を懐古し、鼓舞され続けることを、そして未来の PY たちが SWY での航海に胸を膨らませてくれることを願っています。

Natural Disaster & Youth Leaders

山田 萌結

宮城県出身である私は、兵庫出身の日本人青年と共に災害をテーマにした自主活動を2回行いました。一回目は「災害とまちづくり」、2回目は「災害とユースリーダー」がテーマでした。実は、これは乗船後互いの興味分野を語り合う中で生まれたゲリラ的な企画でした。乗船前から準備していたわけではなかった分、本当に自分たちの知識や経験だけでの勝負で大変なこともありましたが、その分反省会や事前準備に熱が入りました。この企画を通して、私たちが一方的に伝えるのではなく、互いの「経験」をシェアできる場を提供できました。それにより、参加者に災害と自身を関連づけて考えてもらえたように思います。また、一回きりでなく二回やることで、反省を踏まえ工夫できたと感じています。その一方で、企画を通して「仙台防災枠組」など新たな知識も増えました。船内だけでなく事後活動につなげ深めたいと思える、達成感のある活動でした。



Sports & Science

澁谷 麻斗

僕は1人の外国参加青年と共に、自主活動として「スポーツ科学セミナー」を開きました。元々セミナーを開く予定はありませんでしたが、「船の中で何か1つ大きなチャレンジをしたい」「一般的な筋トレのイメージを変えたい」などの思いがあり、やってみることにしました。

セミナーの準備や本番を通して感じたのは、「協力者を見つけ、上手くやろうと思えば、無理だと思ったことも案外できる」という事です。プログラムが始まって間もない頃、総勢240人ほどの青年の前で堂々と英語を話す日本青年を見て、自分には絶対できないなと感じていました。しかし最終的には、セミナーの告知の際に全員の前で話し、セミナー自体も実行することができました。自分のスピーチのクオリティは決して高くありませんでしたが、協力者の存在があり、「失敗してもいい経験になる」と開き直れたからこそ、成し遂げられたと思っています。



これらのほかにも・・・

- ・ SWY WORLD CUP (サッカー)
- ・ Kiso lacquerware (木曾漆器体験)
- ・ Yoga
- ・ SWY MUSEUM (作品展示)
- ・ Stargazing (星空観察・解説)
- ・ Mega Talent Show (タレントショー)
- ・ Okinawan Night (沖縄物産展)
- ・ ファッションショー

など多数の企画が生まれ、運営されました！

Port of Call Activity 寄港地活動

明治150年記念「世界青年の船」事業では、沖縄、オーストラリアのダーウィン、ブリスベンに寄港し、大学訪問やコース・ディスカッションごとの課題別視察などを行いました。

Okinawa 沖縄

今回の寄港地になった沖縄は地理、歴史、文化的な面から見ても日本本土とは少し異なる雰囲気を持っています。参加青年たちは7つのグループに別れ、異なる施設や場所を視察しました。

沖縄、琉球王朝時代に神聖な儀式を行うための場所であった斎場御嶽（せいふあうたき）を訪れたグループは沖縄の神秘的な側面を肌で感じ、空手に挑戦することができたグループは上地流沖縄空手を基本動作から形までの稽古を受けることで、琉球王朝時代から続く先人たちの精神を学ぶことができました。また、平和記念公園を訪れたグループのメンバーたちは、沖縄戦の写真や遺品などを展示した資料館や戦死者の名前が刻まれた平和の礎を見て、改めて世界平和を考える機会となりました。あるグループは学生の半分以上が外国人で、最先端の科学を研究する沖縄科学技術大学院大学を訪れ、次世代科学施設を視察しました。そして別のグループはマングローブ林を視察することに加え、ごみ収集場のシステム

などを学ぶことから沖縄を取り巻く環境問題の現状を知ることができました。コミュニティセンターを訪問したグループは島豆腐を実際に作り、試食することで沖縄の味を感じ、おじいさんの民謡にのせた三線の演奏を生で聞くことができた一方で、児童館を訪れたグループは地元の子供達と百人一首などをして交流を深めました。（稲福 雛子）



1月31日

8:00 9:30

沖縄那覇港に到着

各コースにより別行動

- ① 平和記念公園
- ② 那覇市繁多川公民館
- ③ 漫湖水鳥・湿地センター
- ④ 那覇クリンセンター
- ⑤ 沖縄科学技術大学院大(OIST)
- ⑥ 空手会館
- ⑦ 斎場御嶽
- ⑧ 浦添市立森の児童センター

15:00 18:00

フリータイム

帰船、出航
出国手続き



Darwin (Australia)

ダーウィン（オーストラリア）

ダーウィンでの寄港地活動では、ノーザンテリトリー州の国会議事堂でさんさ踊りのメンバーが披露したことが印象に残っています。メンバー達の素敵な踊りと共に「さっくらちょいわやっせ」という青年達の掛け声と太鼓の音がホールに響きました。さんさ踊りの掛け声には「幸せを引き寄せる」という意味がありますが、さんさ踊りによってその場にいた人達で楽しい時間を共有し、ダーウィンに幸せが運ばれて来たように思いました。また、コース・ディスカッションごとに分かれての活動も行いました。私が参加したグローバルヘルスコースでは Menzies School of Health Research という施設で健康に関する講義

を受けました。オーストラリアの先住民であるアボリジニの子ども達の健康に関する話が興味深かったです。私は大学でリハビリテーションを学んでいます。外国青年と共に“健康”という視点で考えたり交流を深めたことは私の中に変化をもたらす貴重な機会となりました。（菊池 綾乃）



2月8日

8:00 9:00 10:00 12:00 14:00 16:00 19:00

ダーウィン港に到着

入国手続き

SWYAA※オリエンテーション

ノーザンテリトリー州
国会議事堂にて立食パーティーチャールズダーウィン大学にて
パネルディスカッション

帰船

船上レセプション
2月8日

2月9日

9:00 10:45 12:30 15:00 18:00

ピースセレモニー

コースディスカッションごとに
課題別視察

フリータイム

帰船

ブリスベンに向けて出航

※SWYAA=SWY Australia Alumni
(オーストラリア既参加青年)の略



Brisbane (Australia)

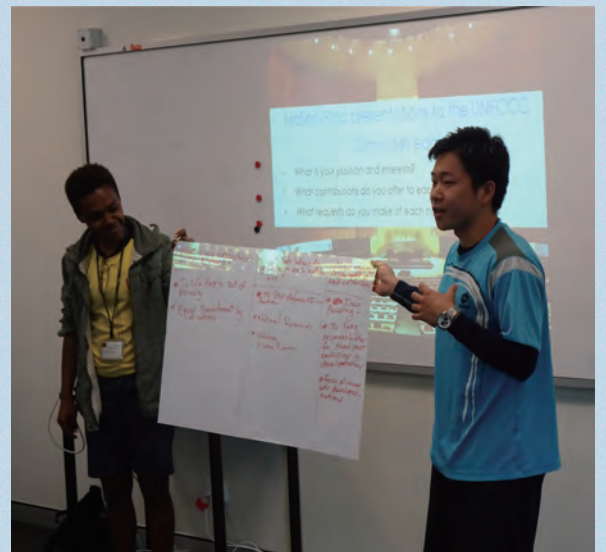
ブリスベン（オーストラリア）

ブリスベンでは中心部からバスで20分ほどにあるクイーンズランド大学で、気候変動問題の啓発活動を行う『The Climate Reality project』の講義とワークショップを受けることができました。講義は、気候変動の原因や予測される被害がわかりやすい映像などでまとめられており、理解がしやすいものでした。ワークショップでは、気候変動をめぐる国際交渉をロールプレイゲーム形式で理解できるもので、普段はなかなかしない「他国で生きるひとの視点に立つ」ということから気候変動問題を考え

る良いきっかけになりました。

※The Climate Reality project=

元アメリカ副大統領アル・ゴアが立ち上げた気候変動問題の啓発活動を行う国際団体（宮川 健太郎）



2月15日

9:00	11:00	12:00	15:30	19:30
オーストラリア参加青年によるオリエンテーション	ブリスベン入港	コース・ディスカッションごと課題別視察	帰船	船上レセプション

2月16日

9:45	14:40	21:00
レッドクリフビーチにてサーフレスキュー研修体験	フリータイム	帰船

2月17日

8:15	11:45	16:00	19:00
クイーンズランド大学にて気候変動に関するレクチャーとワークショップ	ロータリーコミュニケーションでの日本紹介パフォーマンス披露とスポーツデー	帰船	ブリスベン出航

応募から乗船までの流れ

7月下旬～3月

応募

各都道府県の青年国際交流主管課、または全国的な青少年団体へ

1次試験

各都道府県、全国的な青少年団体が定める選考試験

3月～4月

追加募集が実施される年もあります。
※2019度の追加募集は終了しました

6月

2次試験

内閣府が実施（東京・大阪）
筆記試験 英語面接
グループ面接

事前研修

レターグループ決定
コース・ディスカッション決定
委員会決定 等

9月

陸上研修が始まるまで

本事業開始に向けて日本参加青年同士で連絡を取り合い、各委員会やグループが本格的に動き始めます。約4ヶ月を有効に利用するため、英語の勉強や情報収集をするグループも発足しました。

陸上研修

7月

乗船！

事前準備について

事前研修から 1 月の陸上・船上研修開始までは約 3~4 ヶ月あります。その過ごし方は人それぞれですが、学校や仕事の合間を縫って船事業をより充実したものにするためにはどう過ごせばいいのかな？と今からそわそわしてしまう方へ。3 人の参加青年の例を紹介します。

「電話勉強会グループを結成しました」



夏の事前研修後から本番研修までの約 4 ヶ月間にわたり、2 週間に 1 回 1 時間のペースで電話勉強会を行いました。目的は主に、「船での学習をより深めるために事前知識を得ること」と「遠方に住む人も PY 同士でコミュニケーションを定期的に取り続けること」です。事前研修後の打ち上げ中に数名で政治や歴史、教育に関する話をした際、とても盛り上がり、船に乗るまでの間も続けたいという気持ちから始まりました。政治、歴史や教育をはじめ、毎回違う PY がファシリテーターとして自分の得意分野の勉強会を開いてくれました。中には、英語で勉強会を行ってくれた PY もいました。毎回 1 時間を目安に一度切り上げていましたが、盛り上がり収まらず必ず自由時間として 1 時間以上、長い時では 5 時間以上も長引きました。船に乗るまでの間に PY 同士でお互いを知る場としても活躍しました。今後も不定期にはなりますが勉強会を行えたらと考えています。(石田 桜)

「伝統芸能を一から学ぶ機会になりました」

日本の伝統芸「和太鼓」の魅力を伝えたい！この強い思いは 3 ヶ月間、毎週の練習を通して、心から抱いた思いです。船で太鼓を演奏するため、長年日本代表青年の演奏者を指導して下さる先生方のもと、基礎から教えて頂くものの、なかなかコツをつかみづらく、手には血豆が出来るほど、痛い思いをしながら練習を重ねてきました。また、社会人や学生という立場も違えば個性も違う 8 名が 1 つの太鼓のチームとして、全体が揃って練習することも難しい状況の中、短い時間で練習を 1 つ 1 つ大切にしてきました。チームで集まれないときは個人の演奏技術の向上に励み、限られた時間の中、日本代表として感動を与えられる演奏ができるよう練習しました。たくさんの苦労があった分、演奏を終えて、他の参加青年から、拍手喝采を受けたときはとても嬉しかったです。今でも時折太鼓のリズムを刻んでいるほど体に染みついています。(黒田 知幸)



「物産展実現のための準備をしました」



今回、那覇が寄港地になるということで、沖縄について知ってほしいという思いがありました。どうしたら伝えられるか悩んだ末に、沖縄の商品を扱った物産展を開催することにしました。協賛依頼をするのが初めてで、どう進めるか分からない中、毎週会議を開き「どの商品を依頼するのか」「事業の説明及び企画書作り」「電話のシナリオ作り」などの準備をしました。最初に依頼の電話をかけた時のドキドキ感は今でも覚えています。何も知らない人にこの事業を説明する難しさ、私たちだけでなく企業へのメリットが無いといけななど、協賛を頂くことの大変さを学びました。最終的に 8 企業から 12 種類の協賛品を頂くことができ、参加者全員に配れるように 120 個以上の商品を準備してくれた会社もありました。『JAPAN delegation』『ダーウィン 出店』『OKINAWAN NIGHT』計 3 回物産展を開催し、多くの人に沖縄を伝えることができました。早く協賛依頼を引き受けて下さった企業の皆様に、心から感謝いたします。(大城 綾佳)

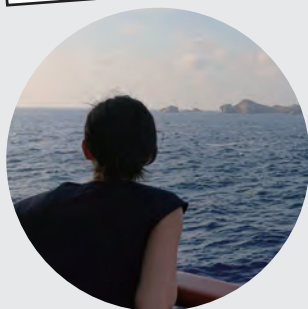
SWYを通して学んだこと・感想



起きたまま夢を見ていたようだった、2ヵ月経った今はそう感じることができます。私がSWYを通じて学んだことは二つあります。一つ目は、自分を肯定することです。それはできない自分を認めることとできる自分を知ることという意味で、

自分を見たくないときもあったし、自分に幻滅したときもありました。でも周りには自分を支えてくれた人がいたから、自分は自分でいいんだと気付くことができました。二つ目は、世界の広さです。私は今までペラペラの薄い紙の上で生きていたのだと感じています。世界は広くて、深くて、いろんな色で溢れており、そんな世界で小さく生きる必要はないのだと気付くことができました。確かに、敷かれた線路に乗り生きていくのもいいと思いますが、そこから外れてのびのびと生きる方が、キラキラした人生を歩めると思います。それはSWYに参加したたくさんの人生の先輩を見て確信することができました。そして私も、そう生きていこうと決意しました。SWYで過ごした日々は、これからも私の支えとなり、人生に欠かせないルーツとなっています。

(参加時 大学1年・飯田 里奈)



青い海や夕焼け空、満天の星空等、360度24時間どの瞬間も美しい景色を眺めることができる船での世界11ヵ国・約240名との共同生活という、本事業の環境は、物理的にも精神的にも日常とかけ離れています。私は仕事中心の生活を5年間程送り、「効率」という価値観を重視して動いていましたが、この特殊な船上の環境では、何か追い立てられることも、誰かと比較されることもなく、その時々 の出来事や対話に一步一步立ち止まることができ、久しぶりに自己の内面に向き合えた、濃密な時間だったと感じています。ワクワクしたり、混乱したり、落ち込んだり…約1ヵ月の共同生活を通して、自分自身への理解が深まったことはもちろん、大切な仲間と出会えたことは私にとって大きな財産です。「日常」に戻った今、以前とは異なる観点で出来事を受け止めていると感じることが多く、事業での出会いが価値観を広げ、自分を成長させてくれたと実感しています。(社会人・四十 詩歩)



乗船前、出会った全ての既参加青年が世界青年の船は本物の "Life changing experience" だと言っていました。下船した今、私も声を大にして願わくばチンボラソ山(世界最高峰のエクアドルの山)の頂上から、最高の "Life changing

experience" だったとすることができます。この経験は私に大きな影響を与え、幸せや未来を創り出すのは自分なのだという当たり前のことに改めて気づかされました。日本のことを全く知らない自分に気づき、茶道を習いはじめ、日常生活の中でも日本人としてのアイデンティティに意識を向けるようになりました。また、地球市民になりたいという思いが一層強くなり、大学では留学生向けの授業を多く聴講しています。これから一生涯、お互いに刺激し高め合える仲間と、より多くの人が幸せに暮らせるような社会を創ることが私の使命だと思っており、この船で出会った仲間の存在が、それが可能だと私に確信させています。この事業に参加できたことを誇りに思います。

(参加時 大学2年・徳満 有香)



下船後、SWYという環境の魅力を改めて感じるようになりました。船内には「良い」とされる概念(=文化)がなく参加青年は既存の評価軸で評価されず、成し遂げたいことを、全力で応援し支えてくれる人が多くいる環境下で実現でき

ると思います。それがSWYの持つ魅力だと思います。当たり前だった支え合いが、とりわけ日本社会では多数派の中で共有される「規範」や「常識」によって埋もれることが多いと感じます。なぜなら、個人の行動をどのように評価するかは、本人の価値観よりも、周りの人々が持つ「規範」や「常識」から生まれた価値基準のほうが強い権限を持つ状態にあるからで、そのような状況では個人の強みを発揮しにくいと思います。私はSWYに参加して、環境が人々に与える影響力の強さを知り、その環境にある空気や価値観を変えられるのは人の力だけだと学びました。今後はより良い社会を目指す人々が持つ素質や思考を伸ばせる環境を整えることに携わり、社会に貢献していきたいと思います。(参加時 大学4年・松田 ゆきの)

事業を終えて、これから

「私」を自由に発信して行く

小澤 茉莉



SWY は、「私」を自由に発信できる場所。今まで色々活動してきた”意識高い系”ラベリングにコンプレックスを感じることもあったけど、SWYer は真正面から自分を受け入れてくれます！実際に、自分の軸でもある「エシカルファッション（人・環境に配慮したファッション）」のセミナーをしたり、ピアノを伴奏をしたり！「私」を発信できた日々でした。発信した時に、「刺激受ける！」"You are a changemaker!"と言われたことが何より励みになったし、その言葉に背中を押されて、今年休学してエシカルファッションビジネスに挑戦！商品開発や、生産者と消費者のコミュニティづくりなど、刺激的な毎日を過ごしています。

SWY で、国も年齢も性別も超えてたくさんの人と寝食を共にする中で「自分」をもっと深く知ることができました After SWY も連絡を取りあって刺激合っています。SWY で感じたエネルギーを原動力に変えて、take action していきます！

オーストラリアでの事後活動

ゾイ・マクファーソン / オーストラリア代表参加青年

The SWY Australia challenge was organised by Laura from this year's Australian Delegation. With climate change being a topic being heavily discussed in the media, it is easy to feel overwhelmed by the amount of information on sustainability being made available. It can sometimes feel like a problem for our governments, and change is out of our hands. This challenge aims to provide you with simple sustainable change you can make in your daily life that will have a positive impact on the environment!

我々オーストラリア代表の事後活動は今年度の参加者であるローラが代表となり動いています。内容としては日々深刻な問題となっている気候変動に関するものです。現代社会には、気候変動への対策に関する情報が溢れており、何をしたらいいのかわからない人が大勢です。一般的に、これらの問題は国単位で動く物だと思われがちです。しかし、変化は我々の手の届く範囲から生まれるのです。我々の事後活動は、身近なアクションから世界を少しずつ変えていくという目的を持って動いています。

SWYの縁が未来の希望

ガイエ・ビルニ / トルコ代表参加青年



このしゃしんはコース・ディスカッションのさいごの日からです。このコースで十一の国からきた友達と先生と一緒にわすれられない思い出をつくりました。みんなと一緒に自分の国のeducationについて勉強して、お互い国の文化や言語や政府のじょうほうをもらいました。この世界をへいわのばしょにかえるために世界青年の船のようなわかい人たちがひつようです。わたしたちがもらったこのじょうほうをつかってみらいをだれもが平和にすむことができるばしょにかえます。SWYのなかでつかった縁が我々の未来のきぼうになります。Gaye Birni

※本人による原文をそのまま記載

よくある質問と回答

Q. 英語力が不安です。

A. 1 TOEIC のリスニングのシャドーイングなど実践的な練習を通して自分の考えを英語で述べられるようにしました。考えられる項目について英語での自分の意見を書き出してみるのもいいと思います。

A. 2 後期の大学での語学の授業を少し増やしました。授業以外で英語の勉強に時間を割けなかったため積極的にネイティブの先生と話すようにしました。

A. 3 スカイプ英会話を利用して様々な国の人のアクセントになれることを目指しました。また、スマホに英語のニュースアプリを入れ、隙間時間に読むようにしていました。

Q. 事業参加に当たって学業や仕事との折り合いは？

A. 1 秋学期の授業を選択する際に担当の教授にテストをレポートに変更してもらえるか相談してから履修登録を行いました。(学生)

A. 2 大学4年生だったので、応募する段階から教授と話し合い、周囲よりも早めに研究を進めて卒論を書き上げました。(学生)

A. 3 最終選考が終わった後に上司に相談しました。理解のある上司及び職場だったので会社の休職制度、有給休暇、欠勤等様々な観点から人事部と所属部署で相談してもらえました。(社会人)



Be the change
that you wish
to see in the world